

国語 2 説明的な文章を読む

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

・「成功」の反意語は「失敗」である
・「賛成」の反意語は「反対」である
・「好き」の反意語は「嫌い」である
これらは小学生にもわかるような「常識」に見えます。
本当にそうでしょうか？

今回はこうした固定観念を異なる視点から見ることで新しいものの考え方ができるという「やわらかい頭の使い方」の事例を解説したいと思います。

まずは「成功」の反意語は「失敗」であるという常識を違う見方で見てみます。成功と失敗は一般には何らかの結果の「両極」であると考えられるためにこれらが反意語と見なされるわけです。つまり次ページの図の図の横棒上のような関係になります。ここでは成功と失敗が両端にある構図ですが、視点を変えるためにこの軸を真ん中から二つに「折り曲げて」みます。図の中段。こうすると、左の端には「成功」と「失敗」が並び、右端にはそれらの中間、つまり「成功でも失敗でもない」という状態が位置づけられます。ここで「成功でも失敗でもない」という状態を改めて考えてみましょう。そもそも何かをやれば、その結果がうまくいけば「成功」となり、そうでなければ失敗となります。たとえそれが失敗でも、やった結果やそこからの教訓は残るし、やった前とは状況は確実に違ってくるはずですが、何ももしなければ、「成功でも失敗でもない」状況がずっと続くことになります。そう考えると、「成功でも失敗でもない」という状況を「一番作り出すのは何ももしない」という状態であることに気づきます。そう考えれば、この半分になった軸の両端が再び一つの考え方の軸になっているとわかります。つまり、「何か行動する」と「何ももしない」という二極になるということです（図の下段）。

この構図からおわかりでしょう。「成功」と「失敗」は実は紙重の「同意語」で、それらの反意語は「何ももしないこと」ということになるのです。

一九九〇年代を代表するイタリアのサッカー選手、ロベルト・バツジョは「PKを外すことができるのは、PKを蹴る勇気のある者だけだ」という言葉を残しています。この言葉は先の「成功と失敗の構図」から見ると非常によく理解できます。

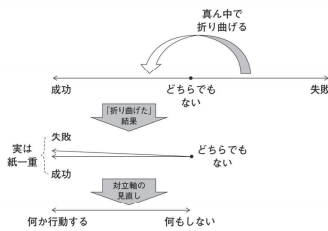
少なくともPKで失敗するためには、競技場に出ていってPKを蹴るだけの資格を得る必要があります。逆に失敗に「一番遠い人」というのは「観客席やテレビの前」で座って見ている人だということになります。

また、このような「両極と真ん中は実は対照的であって、両端に見えるものは実は似ている」という考え方は北極・赤道・南極の関係性にも当てはまります。文字通り両極のように見える北極と南極が実は気候的にも似ていて、対極にあるのが赤道だという構図です。

同じように考えてみると、「賛成」と「反対」は「明確に自分の意見を持っている」という点でむしろ「同意語」になり、この対極は「どちらでもない」「つまり「自らの明確な意見がない」ということになります。

何かを実施しようとするときには必ず賛成する人もいれば反対派を説得する人も大変ですが、むしろ「明確に意見を持っている人」を説得する方が大変な場面もあるのではないのでしょうか。「反対している人」の方が、理解が得られれば逆に賛成に回ってくれることもあるのに対して、「賛成でも反対でもない人」というのは最後までつかみどころがありません。

同様に、「好き」と「嫌い」は「対象への関心が高い」という点では同意語で、これらの反意語は「無関心」と見ることもできます。レストランやお店等でのクレームを受けた場合に、これをチャンスととらえる人がいます。それは、クレームするときの人間は



「感情が高ぶって精神的に近づいている」分、その後は対応を誤れば「座と来ない」ことになってしまいますが、さすがにサービスマンを流す等のファロローをすれば、逆に常連さんになってできるチャンスがあるということでしょう。

この考え方を応用すると、「新しいアイデアを創造的に生み出せる人」と「文句ばかり言っている人」というのも実は紙一重であることがわかります。「半分に折った」軸の両端には、「現状に満足していない」と「現状に満足している」という対極の言葉が当てはまります。つまり、実は「不満ばかりの人」はそのエネルギーを前向きに使えば実はアイデアマンに変身する可能性があるということです。

往々にして組織というのは、斬新なアイデアや創造性を求めるといういながら、「不満だらけの人」を排除し、「協調性のある人」を登用していきます。これがいかに矛盾しているかというのも「半分に折った」構図を見れば明らかでしょう。

「両極端か中庸か」という構図、ぜひ読者の皆さんの身の回りでも探して「半分に折って」違う見方で考えてみてください。

（細谷功・ヨシタケシンスケ「やわらかい頭の作り方 身の回りの見えない構造を解明する」による）

（注1） PKは試合中に相手のゴールの正面に立て与えられるキックの一つ。ゴールの正面にあるペナルティマークにボールを蹴る。ゴールキーパーだけを相手にゴールをねらって蹴る。また、試合の勝敗が決まるといふにも、ペナルティマークからボールを蹴ることを言う。

（注2） クレームは商品、相手の行為や処置などに対する苦情。注文。

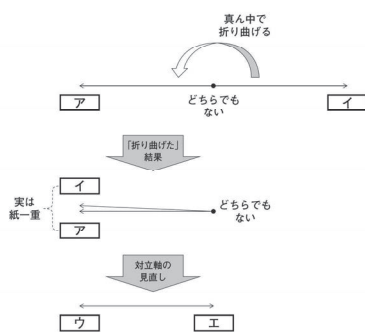
（注3） 常連はある飲食店などにいつも来る客。

（注4） 中庸は考えや行いがどちらにもかたらないこと。

—— 線部①「固定観念を異なる視点から見る」とありますが、本文中に示されている具体例として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 一般には「成功」の反意語は「失敗」と見なされているが、「何か行動する」という点では同意語だといえる。
- 2 一般には「北極」の反意語は「南極」と見なされており、「両端に見える」という点でも反意語だといえる。
- 3 一般には「賛成」の反意語は「反対」と見なされているが、「自らの明確な意見がない」という点では同意語だといえる。
- 4 一般には「好き」の反意語は「嫌い」と見なされており、「対象への関心が高い」という点でも反意語だといえる。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------------|---|------------|---|---------|---|----------|
| 1 | ア | 判断を示す | イ | 判断を示さない | ウ | 提案を肯定する | エ | 提案を否定する |
| 2 | ア | 文章を追加する | イ | 文章を削除する | ウ | 情報を増やす | エ | 情報を減らす |
| 3 | ア | 一歩前進する | イ | 状況が変わる | ウ | 一歩後退する | エ | 状況が変わらない |
| 4 | ア | コンクールで入選する | イ | コンクールで落選する | ウ | 物事に挑戦する | エ | 物事に挑戦しない |



四 ―線部④「ぜひ読者の皆さんの身の回りでも探して『半分に分けて』違う見方で考えてみて下さい」とありますが、次の図の
ア、イ、ウ、エに入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、あとの1から4までのの中から一つ選びなさい。

- 三 ―線部③「逆」とありますが、何と何が「逆」なのですか。次の1から4までのうち、最も適切なものを一つ選びなさい。
- 1 店がクレームを言った客への対応を誤ること、その客が二度と店に来なくなること。
 - 2 店がクレームを言った客にうまく対応すること、その客が店の常連さんになってくれること。
 - 3 客が店に対してクレームを言って困らせること、店が客のクレームをチャンスととらえること。
 - 4 クレームを言った客が二度と店に来なくなること、その客が店の常連さんになってくれること。

- 二 ―線部②「さえ」と同じ意味で用いられているものを、次の【用例】の1から3までのの中から一つ選びなさい。また、その【意味】を、あとのアからウまでのの中から一つ選びなさい。
- 【用例】
- 1 厳しい環境で植物さえ生えない。
 - 2 私は本さえあれば満足だ。
 - 3 風が強いうえに雨さえ降ってきた。
- 【意味】
- ア 物事がさらに付け加わる。
イ 一例を挙げて他の物事を推測させる。
ウ それだけで十分である。

1. 出題の趣旨

- ・ 文章の中心的部分と付加的部分とを読み分け、内容を捉えること
- ・ 助詞の働きについて理解すること
- ・ 文章の展開に即して内容を捉えること
- ・ 文章の内容を捉え、書き手の考えを理解すること

これまでの全国学力・学習状況調査の結果を見ると、複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価することなどに課題があることが分かる。例えば、「平成31年度（令和元年度）

【中学校】報告書」では、「読むこと」について「文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをもつことや、文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉えることに課題がある。」（P. 8）としている。

本問では、これらの課題を踏まえて、「固定観念を異なる視点から見ることで新しいものの考え方ができる」ということについて、複数の具体例を示しながら図を用いて説明している文章を取り上げ、第1学年「C 読むこと」（1）イの「文章の中心的部分と付加的部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること。」の指導事項を中心に出题した。設問一では、文章の中心的部分と付加的部分を読み分け、書き手の考えと具体例との関係を叙述に即して的確に捉えること、設問三では、文章の展開に即して原因と結果など情報と情報との関係に留意しながら内容を捉えることを求めている。設問四では、書き手の考えと具体例との関係を叙述に即して捉えた上で、身の回りにある別の例に当てはめて考えることを求めている。また、設問二では、助詞の働きについて理解することを求めている。これは、助詞の働きを単に知識として学習するだけでなく、実際に文章を読む際に活用し、生きて働く力として身に付けていくことが大切であることを踏まえたものである。

2. 調査問題の活用にあたって

設問一， **設問三**， **設問四** の趣旨を生かした学習指導の工夫

■学習指導要領における領域・内容

〔第1学年〕 C 読むこと

イ 文章の中心的部分と付加的部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること。 《文章の解釈》

■学習指導要領に示されている言語活動例との関連

〔第1学年〕 C 読むこと

イ 文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと。

(1) 言語活動を通じた学習指導の工夫について

○ 第1学年「C 読むこと」(1)イについて、文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読む言語活動を通して指導する際には、図表が文章の中心的部分、又は付加的部分のどの部分と関連しているのかを確認するなどして、書き手の伝えたい内容をより的確に読み取るように指導することが大切である。その際、図表が文章の内容をより分かりやすくするために使われている場合や、文章が図表の解説になっている場合などがあることに留意して読むように指導することも効果的である。また、読む目的に応じて段落ごとに内容を捉えたり、段落相互の関係を正しく押さえたりしながら、更に大きな意味のまとまりごとに、文章全体における役割を捉えるように指導することも重要である。

○ 指導にあたっては、以下のものも参考になる。

- ・ 平成22年度【中学校】報告書 P.130「論理の展開の仕方を的確にとらえ、内容をとらえることができるようにする。」
- ・ 4年間のまとめ【中学校編】 P.104「論理の展開の仕方を的確にとらえ、内容をとらえることができるようにする。」
- ・ 平成23年度【中学校】授業アイデア例 P.3～P.4「文章の内容を『Q&A集』の形式で紹介する。」
- ・ 4年間のまとめ【中学校編】 P.96～P.97「文章の内容を『Q&A集』の形式で紹介する。」
- ・ 平成24年度【中学校】報告書 P.148「文章の展開に即して内容を捉えることができるようにする。」
- ・ 平成24年度【中学校】授業アイデア例 P.2「目的に応じて必要な情報を読み取ることができるようにする。」
- ・ 平成24年度【中学校】報告書 P.150「目的に応じて必要な情報を読み取ることができるようにする。」
- ・ 平成30年度【中学校】授業アイデア例 P.5～P.6「目的に応じて説明的な文章を読む」
- ・ 言語活動事例集【中学校版】 P.25～P.26「文章と図表との関係を読み解こう」

(2) 授業アイデア例について

- **授業アイデア例Ⅰ**では、「固定観念を異なる視点から見ることで新しいものの考え方ができる」ということについて、複数の具体例を示しながら図を用いて説明している本問の文章を活用した授業アイデア例を示した。文章の書き出しの部分に着目して読んだり、文章中に示されている具体例や図に留意して読んだりすることを通して、文章の中心的な部分と付加的な部分とを読み分けて論理の展開の仕方を捉え、内容を理解する力を身に付けることをねらいとする。
- **授業アイデア例Ⅱ**では、平成30年度全国学力・学習状況調査【中学校】国語B¹で用いた、文化庁国語課『文化庁国語課の勘違いしやすい日本語』を出典とする文章を活用した授業アイデア例を示した。目的に応じて何を中心にして文章を要約するのかを考えたり、要約した文章を互いに読み合ったりすることを通して、文章の中心的な部分と付加的な部分とを読み分けて論理の展開の仕方を捉え、内容を理解する力を身に付けることをねらいとする。

3. 出典等

本問及び授業アイデア例Ⅰは、細谷功・ヨシタケシンスケ『やわらかい頭の作り方 身の回りの見えない構造を解明する』（2015年3月 筑摩書房）による。授業アイデア例Ⅱは、文化庁国語課『文化庁国語課の勘違いしやすい日本語』（2015年12月 幻冬舎）による。

授業アイデア例Ⅰ

【指導のねらい】

文章の中心的部分と付加的な部分とを読み分けて論理の展開の仕方を捉え、内容を理解することができるようにする。

【授業アイデア例】

教材

● 令和2年度全国学力・学習状況調査【中学校】国語²

学習の流れ

第1時、第2時

① 学習の見通しをもつ。



教師

文章の中心的部分と、それを支える例示などの付加的な部分とを読み分け、書き手のものの見方や考え方に気を付けながら、文章の内容を理解しましょう。

② 文章全体を読んだ上で、1行目から7行目に着目し、このような書き出しにした筆者の意図について各自で考え、ノートに書く。

③ ②について全体で確かめる。

【生徒の発言の例】



私たちが「常識」と感じていることの複数の具体例を示した上で、「本当にそうでしょうか？」と問いかけることで、読み手の興味・関心を喚起しているのだと思います。

6行目から7行目にかけて、「今回はこうした固定観念を異なる視点から見ることで新しいものの考え方ができるという『やわらかい頭の使い方』の事例を解説したい」とあり、この文章で述べようとしていることを読み手に意識させているのだと思います。



④ 筆者が提示している具体例をノートに書き出し、ペアで確認する。

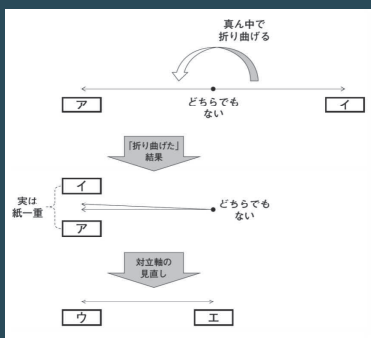
⑤ ④で確認したことを基に、筆者が述べていることについて、図を活用しながら全体で確認する。



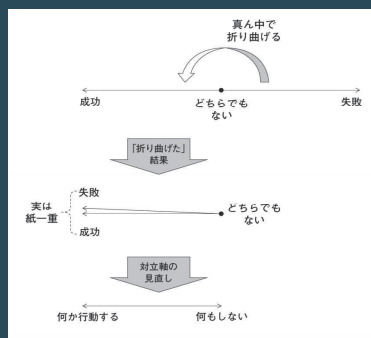
筆者は「固定観念を異なる視点から見ることで新しいものの考え方ができる」ことについて、「成功」と「失敗」の例を取り上げ、図を用いて説明しています。文章と図とを関連させながら、筆者が述べている内容を捉えましょう。また、他の例についても図に当てはめて考えてみましょう。

【板書例】

「賛成」と「反対」の例の場合
「好き」と「嫌い」の例の場合



○ 他の例について



○ 本文に示されている図

【生徒の発言の例】



本文に示されている図の上段は、「成功」の「反意語」は「失敗」であるという「固定観念」のことを示しています。図の中段は、上段の図を折り曲げて「異なる視点」から見ると、「成功」と「失敗」は紙一重であり、その対極が「どちらでもない」状態になることを示しています。

そして、図の下段は「成功」と「失敗」について、「何か行動する」という点で二つは「同意語」であり、その「反意語」は「何もしない」ということを示していますね。



他の例を、黒板の左の図に当てはめて考えてみると、「賛成」と「反対」の例については、アには「賛成」、イには「反対」が入ります。それらを「異なる視点」から見ると「賛成」と「反対」は紙一重の「同意語」になり、ウには「明確に自分の意見を持っている」、エには「自らの明確な意見がない」が入ります。

「好き」と「嫌い」の例については、アには「好き」、イには「嫌い」、ウには「対象への関心が高い」、エには「無関心」という言葉が当てはまります。本文にある「レストランやお店等でのクレーム」の説明も納得できました。



⑥ 設問一、三、四を解き、筆者が述べていることをグループで再確認する。



文章の冒頭にある「固定観念を異なる視点から見ることで新しいものの考え方ができる」ことについて、筆者が述べている内容を捉えることはできましたか。設問を解いたり、文章を読み返したりしながら確認しましょう。

第3時

- ⑦ 文章の論理の展開の仕方で気付いたことを各自でノートに書く。
- ⑧ ⑦について全体で確かめる。
- ⑨ 学習を振り返る。

【活用のポイント】

- 本授業アイディア例は、第3学年「C 読むこと」(1)イを指導することを想定した学習の流れを示している。設問一、三、四で取り上げた指導事項の定着に課題が見られる場合には、④～⑥に示したように、これまでに学習したことを想起し、文章の中心的部分と付加的な部分とを読み分け、文章と図との関連を考えて読むように指導するとよい。第3学年の評価に当たっては、②～⑧で、文章の論理の展開の仕方を捉えて内容を理解しているかについて、ノートに書いた内容や発言の様子などを基にして評価することが考えられる。

【他学年で活用する際のポイント】

- 第1学年で、設問一、三、四で取り上げた指導事項について指導する場合には、④～⑥を中心に授業を行い、ノートに書いた内容や発言の様子などを基にして評価することが考えられる。
- 第2学年で、設問一、三、四で取り上げた指導事項の定着に課題が見られる場合には、④～⑥を中心に授業を行うとよい。また、第2学年「C 読むこと」(1)イの指導事項を取り上げ、それぞれの具体例が文章の展開の中でどのような役割を果たしているかについて考えるように指導し、ノートに書いた内容や発言の様子などを基にして評価することが考えられる。

授業アイデア例Ⅱ

【指導のねらい】

文章の中心的部分と付加的な部分とを読み分けて論理の展開の仕方を捉え、内容を理解することができるようにする。

【授業アイデア例】

教材例

- 教科書や学校図書館にある書籍等に掲載されている説明的な文章など

学習の流れ

第1時

① 学習の見通しをもつ。



教師

グループごとに説明的な文章を選んで読み、関心をもったことや分かったことなど、他のグループの人に伝えたいことを中心に要約しましょう。

<文章はこちらから>



② 教師が用意した説明的な文章の中からグループごとに読む文章を決め、他のグループの人に伝えたいことに印を付けながら、各自で文章を読む。

(ここでは、平成30年度全国学力・学習状況調査【中学校】国語B¹で用いた、文化庁国語課『文化庁国語課の勘違いしやすい日本語』を出典とする文章を活用した学習の流れを示す。本書籍にある他の文章を活用することも考えられる。)

③ ②で印を付けた内容を基に、伝えたいことについてグループで交流し、どのようなことを中心にして要約するのかを決める。

【交流している場面の例】



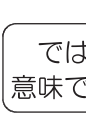
私は、「天地無用」という言葉の本来の意味を初めて知りました。グラフを見ると、本来の意味を捉えられていない人が5割近くいると分かりました。



本来の意味を捉えられていない人の中でも、「上下を気にしないでよい」と全く逆の意味で捉えている人が29.2%もいることが問題だと思います。



私もそのことに関心を持ちました。なぜ本来の意味とは逆の意味で捉えている人が多いのかが気になりました。その理由については、いくつか書かれているようです。



では、私たちのグループは「天地無用」という言葉について、本来の意味とは逆の意味で受け取っている人がいる理由を中心に要約しましょう。



第2時

④ ③で決めた内容を踏まえて各自で要約するとともに、文章の論理の展開の仕方で気付いたことをノートに書く。

ポイント

要約する際には、目的に応じて必要な情報を過不足なく取り上げ、整理することが大切です。そのために、文章全体を読んで各段落の役割について考えたり、言葉の使い方に着目したりしながら、筆者がどのように論理を展開しているかを捉えましょう。



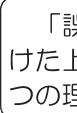
- ⑤ ④で要約した文章をグループで交流し、必要な情報が整理されているかを確認する。

〔交流している場面の例〕

※ ICT機器を活用し、ホワイトボードなどに文章を映して交流するなどの工夫をすることも考えられる。



この文章は、大きく「話題の提示」、「『天地無用』の本来の意味」、「理解の実態」、「誤解の理由」、「対応策」という構成になっているので、「誤解の理由」が書かれている段落に着目してまとめました。



「誤解の理由」について、筆者は「どのような理由があるのでしょうか」と問いかけた上で、「また」という接続詞の前後でそれぞれ理由を述べているので、大きく二つの理由を書く必要がありますね。



「誤解の理由」は、要約の中心となる部分ですが、分かりやすく説明するためには、全体の内容にも触れた方がよいかもしれませんね。

- ⑥ ⑤で交流した内容を踏まえ、必要に応じて、要約した文章を各自で修正する。

第3時

- ⑦ ④～⑥で要約した文章をグループでまとめ、何を中心に要約したのかを示す。

〔グループでまとめた文章の例〕

○ 要約した文章
宅配便の段ボール箱などに貼られている「天地無用」という言葉は、本来「上下を逆にしてはいけない」という意味です。しかし、文化庁の調査によると「上下を気にしないでよい」という逆の意味で受け取っている人が29・2%います。
誤解の理由は、現在、「無用」があまり使われなくなり、「無用」の「してはならないこと」という意味が分りにくいことにあります。
また、「天地無用」という言葉は、「天地を逆にすること無用」のように、「逆にすること」に当たる内容が省略された言い方になっています。そのため、「無用」の意味を「してはならないこと」以外の意味で捉えてしまい、「天地はいらない」上下は気にしないでいい」などと解釈されることになりやすいと考えられます。

○ 何を中心に要約したのか
「天地無用」という言葉について、本来の意味とは逆の意味で受け取っている人がいる理由。

- ⑧ ⑦で書いた文章を他のグループの人と互いに読み合い、感想を交流する。

- ⑨ 学習を振り返る。

【活用のポイント】

- 本授業アイディア例は、第3学年「C 読むこと」(1)イを指導することを想定した学習の流れを示している。設問一、三、四で取り上げた指導事項の定着に課題が見られる場合には、②～⑥に示したように、これまでに学習したことを想起し、目的に応じて文章を読み、必要な情報を過不足なく整理するように指導するとよい。第3学年の評価に当たっては、④、⑤で、文章の論理の展開の仕方を捉えて内容を理解しているかについて、ノートに書いた内容やグループでの交流の様子などを基にして評価することが考えられる。

【他学年で活用する際のポイント】

- 第1学年で、設問一、三、四で取り上げた指導事項について指導する場合には、②～⑥を中心に授業を行い、ノートに書いた内容やグループでの交流の様子などを基にして評価することが考えられる。
- 第2学年で、設問一、三、四で取り上げた指導事項の定着に課題が見られる場合には、②～⑥を中心に授業を行うとよい。また、第2学年「C 読むこと」(1)イの指導事項を取り上げ、各段落が文章全体の中で果たす役割について考えるように指導し、ノートに書いた内容やグループでの交流の様子などを基にして評価することが考えられる。